

## 幼児理解につながる授業の検討： 領域「人間関係」を視点にして

### A Study of Lessons Leading to Child Understanding: From the Perspective of the Area “Human Relationships”

キーワード：理解、人間関係、保育者養成、幼児教育

Keywords: Understanding, Human Relationships, Childcare and Education Training,  
Child Education

村石 理恵子

MURAISHI Rieko

#### Abstract

The development of infants' skills in interacting with others is the basis of the guidance of the area “Human Relationships” in the training of future childcare education workers. With the aim of developing a lesson specialty matters concerning development of these skills, we studied how students understand the appearance of in infants from photographs of childhood receiving care. From the results, the importance of good understanding of infants became clear as a fundamental understanding before the assumption of behavior as a childcare education workers. Based on this, we designed a lesson plan that not only can achieve the overall goal of the lesson on “Infants and Human Relationships”, and but can also cultivate understanding of infants with a relativistic viewpoint based on photographs.

#### I 問題の所在

##### 1. 領域及び保育内容の指導に関する科目の創設

2017年3月に新しい幼稚園教育要領が告示され、学校教育の始まりとしての幼児教育の視点が明確化された。こうした背景の中で、2019年4月1日より新教職課程がスタートすることになった。現行では、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」、「教科または教職に関する科目」の3区分に分かれている科目区分を、新しい教職課程では、科目区分の大括り化を図り、教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことを可能とする「教科及び教職に関する科目」となっ

た。幼稚園の場合、「領域及び保育内容の指導に関する科目」の中に「イ領域に関する専門的事項」、「ロ保育内容の指導法」が創設された。

本学で領域に関する専門事項を教授する新設科目は「子どもと健康」「子どもと人間関係」「子どもと言葉」「子どもと表現」である。これら領域に関する専門事項の科目での学びは、「領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする」ので、「幼稚園教育において、何をどのように指導するのか」という視点で見たときの「何を」を深める部分であり、幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、よ

り深い内容が求められる。」のである(保育教諭養成課程研究会2017)。

## 2. 幼児理解と領域「人間関係」

「幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なのは、一人一人の幼児に対する理解を深めること」であり、子どもを理解することが、保育を理解することにつながる(文部科学省2010)。

さらに、「保育における幼児理解は、子どもとの温かい関係を基盤にして、子ども一人一人に即してその行動を肯定的にとらえ、その意味を保育者が推測しながらかかわり、かかわりながら推測を更新するという循環の中で行われるものであるといえる」(砂上2016)。

保育者は、現場で関わりながら自分の行動を子どもがどう受け止めていたのかを解釈し、その循環をメタ的に捉える。関わりの各瞬間では、直接的な関わりに懸命であるが、同時に関わりあう子どもと自分に対してメタ的客観的視点をもつことで、自分の行為についても評価を行い、改善することにつながるのである。幼児を理解することを基盤として、保育現場での行為を選択する瞬間に向かうために、保育者養成の授業では、どのようなことを学習しておく必要があるだろうか。

ここで、領域に関する専門事項で「人間関係」は、全体目標として、「当該科目では、領域「人間関係」の指導の基盤となる、幼児と人との関わる力の育ちに関する専門的事項についての知識を身に付ける。」があげられている(保育教諭養成課程研究会2017)。また、幼児と人間関係における現代的課題としては、一般目標は「幼児を取り巻く人間関係をめぐる現代的課題を理解する」であり、到達目標は、「①幼児を取り巻く人間関係の現代的特徴とその社会的背景を理解している。②人と関わる力の育ちが、その後にくる一人一人の人生を支える力となることを理解している。」となっている。

さらに幼児期の発達と領域「人間関係」としては、一般目標は「幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論的視点から理解する」ことがあげられ、到達目標は①幼児期に育つ人と関

わる力の発達について身近な大人との関係から説明できる ②幼児期の遊びや生活の中で育つ人と関わる力の発達について、教師との関係、幼児との関係、集団の中での育ちを観点として説明できる。③自立心の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。④協同性の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。⑤道徳性・規範意識の芽生えについて、発達の姿と合わせて説明できる。⑥家族や地域とのかかわりと育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる」の6つがあげられている。領域「人間関係」は、関係論的視点から、発達と合わせて理解することを目指しているのである。保育者が幼児個人だけに注目するのではなく、幼児にとって“他者とは誰か”、“他者とどのような関係を築くのか”を知ることが、幼児一人一人の理解につながる。領域に関する専門事項の「人間関係」では、幼児を関係論的観点から理解することを学ぶのである。

そこで、具体的に、関係論的観点をもって幼児を理解するための授業は、どのようなものか、領域に関する専門事項での学習内容を吟味することが必要であると考えられる。科目開設の際の位置づけは、「子どもと人間関係」は、幼児理解の概要の学修であり、「保育内容(人間関係)指導法」は、実際の関わりについての学修である。

## 3. 現カリキュラムのなかの子ども理解の学修内容から

本学2018年度入学者のカリキュラムでは、1年後期「保育内容(人間関係)指導法」・2年前期「幼児理解」の配列である。保育内容指導法における領域「人間関係」の授業については、筆者が自己開示・関係性の構築・幼児理解をポイントにおいた授業プログラムを提案し、実施していた経緯がある(村石2015)。ここでの関係性の構築は、幼少期の学生自身を取り巻く関係性を題材にする内容、幼児の遊んでいる場面をロールプレイで体感する内容を扱っていた。また、幼児理解は、写真や映像を視聴するなかで子ども同士の関係を理解していく内容を扱った。2018年度授業プログラムにおいても、3つのポイント含めた内容になっている。

「幼児理解」(2年前期)では、幼児を理解するための保育者の姿勢を学びながら、教育実習での具体的事例をふまえた、幼児を理解することの深化を目指している。筆者は、この授業の中で、1枚の写真を用いた幼児理解を調査した研究を行っている。(研倫審・平29-20号)

対象：A短期大学「幼児理解」2年生2クラス  
60名

時期：2017年4月17日及び18日

「幼児理解」授業の教科書にしている、『幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価』(文部科学省(2010))の中の1枚の写真(画面の中央にいる人物A、コマ、後ろ姿の人物Bが写っている)を、観察し自分が何を理解したのかを表す。

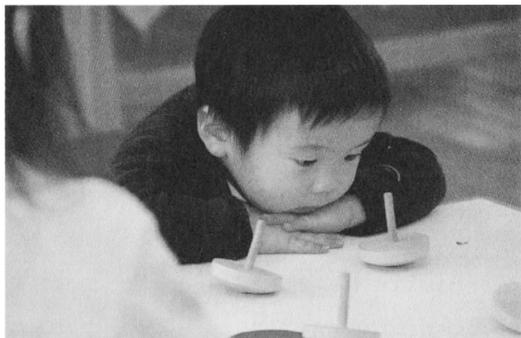


図1 出典：文部科学省(2010)『幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価』ぎょうせい

問1. 写真に映っているものを、下記枠内に描写してみよう(図2)

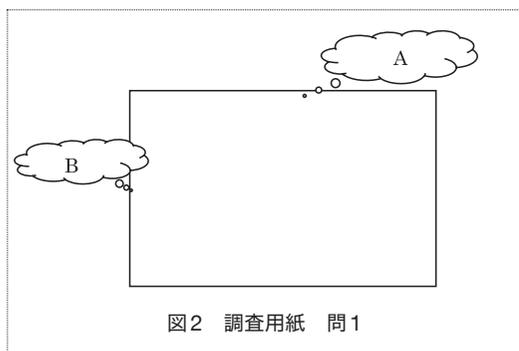


図2 調査用紙 問1

問2. 写真から読み取ってみよう(人物A、Bの考えていることは?)

問3. 写真に映っているものを、文章で表してみよう

この調査の結果、問1での描写は、写真の中央にいて表情が見える人物(A)は全ての学生が描いていた。観察した内容から情報を取捨選択し、人物の表情や姿勢を自分なりに描いていた。

問2では、「上手く回らなくてつまらなそうに見ている」「どうして回るか不思議に思っている」といった行動や気持ちの読み取りをしていた。

問3では、Aを中心として、「コマを見つめてどうやって遊ぶのかをつぶして考えている。女性の保育者が見守っている。コマが回っている。不思議そうに見える。」といった表現で記述されていた。また、Bを保育者と仮定し「保育者は何か考える事をしている幼児の様子をうかがっている。保育者は幼児がこまに興味があり、どのようにしたら上手く、早く回す事が出来るか考えていると予測したので、話かけず様子を見ている。保育者は幼児が何を考えているのか、聞きだすタイミングをうかがっている。」、Bを女児と仮定し、「女の子は、男の子がコマが回っているのを夢中で見ているのを見て、一緒に遊びたいと思ってみている。」といった記述をしており、観察対象の人物が何をしているか、を読み取ることから始め、状況を想像することで、幼児への理解を深めようとしていることがわかった。対象の写真は、例えば笑顔でコマを回しているというものではなく、何をしてどのように感じているのか、読み取りやすいものではなかった分、理解しようとしたと考えられる。

麻生(2009)は、現象的観察をスケッチで表す試みを行った結果、対象についての絵画表現に時間性が含まれることで、その対象をどのように理解しているかが反映されることを明らかにしている。対象を写實的にそのままを描くのではなく、その対象の時間経過を解釈したことを反映した結果としての描写になるということである。また、保育現場での研修として、ポートフォリオやドキュメンテーションが多く用いられるようになった。写真が保育実践者間の共通理解に果たす役割は大きい。保育者養成においても、神永(2016)

が提案しているように、写真から「(子どもは)何をしているか」等を読み取る試みは、子どもを理解し、保育現場の状況の把握を行うための問いとなっている。またエピソード記録の重要性は、鯨岡(2002)岡田ら(2008)等で示されている。

保育者として関係論的観点をもった幼児理解はどのように培われるのか、その実態を明らかにするために、1枚の写真から読み取る調査の項目に“自分が保育者だったら”という想定の中での理解を行う「問4」を加え、調査を実施する。その結果から、幼児の理解を深めていくために適切な授業内容を導き出したい。

## II 研究目的

幼児期の発達と領域「人間関係」の到達目標を具現化するために、領域「人間関係」の指導の基盤となる、幼児の人と関わる力の育ちに関する専門事項を見据えた授業について、幼児が園生活において育む人間関係を、関係論的視点から理解することへの認識を涵養する授業プログラムを構築することである。

## III 方法

### 1. 対象

A 短期大学児童教育学科 2年次学生 52名

### 2. 調査実施

調査日：2018年7月10日 2年次開講「幼児理解」授業内

本調査の実施においては、研究の趣旨説明等を行い、インフォームドコンセントで研究への承諾を得る。この調査票の集計・分析を行う。なお、本調査は学内研究倫理委員会の審査を経たものである。(研倫審・平30-3号)

### 3. 調査内容

1枚の写真(画面の中央にいる人物A、コマ、後ろ姿の人物Bが写っている)を見て、自分が何を理解したのかを表す。(前出図1、図2)

- 問1. 写真に映っているものを、下記枠内に描写してみよう
- 問2. 写真から読み取ってみよう(人物A、Bは誰か。考えていること、発言などを想像する)
- 問3. 写真に映っているものを、文章で表してみよう
- 問4. この写真の状況に対して、保育者としてあなたはどのようにかかわるか

## 4. 分析方法

調査用紙「写真から考えよう(平成30年度)」について、先行調査結果「同(平成29年度)」を参照しながら、分析を行う。その際、以下の幼児理解の視点に基づき、分析する。

〈本研究における幼児理解の視点〉

- 1 「観察し、解釈する」具体的には、「子どもが行っていること(行動)がわかる」、「子どものプロフィール(何歳か、性別、クラス等)がわかる」、「子どもの内面(思い、考え等)がわかる。」ことである。
- 2 「行動する」具体的には、「保育実践者が何らかの行動(援助、環境構成等)をとる」ことや「評価を行う」ことである。

問1: 絵として何が描写されたのか、集計し傾向を明らかにする。画面の中心にある人物A、人物Aがコマを注視している、等の傾向を捉える。

問2: 人物A、Bが誰だと考えたのか、集計し傾向を明らかにする。人物Aの考えや発言をどう想像したのか、集計し傾向を明らかにする。

問3: 文章で表していることの内容について、集計し傾向を明らかにする。文章で表していることと問1絵で描写していることとの比較を行う。

問4: 保育者として想定するかわりについて、カテゴリーに分類し、傾向を明らかにする。カテゴリー(1 コマを回せるように指導する、2 見守る、3 子どもがどうしたいか話を聞く、4 要求に合わせる、5 一緒に遊ぶ、6その他)

こうした分析を踏まえ、幼児期の人間関係の発達について、幼児が園生活において育む人間関係を、関係論的視点から理解することへの認識を涵養する授業プログラムを構築する。

## IV 結果

結果は、問1～3については、一部2017年度調査(表中H29と示す)と比較しながら示す。

### 1. 問1 写真に映っているものを表す(絵)

全ての学生が人物A、Bが含まれている何らかの絵を描いて回答している。写真は人物Aが中央にいて、視線がコマにあることが中心事項である。さらに、そばにいる人物Bや背景などが描写されているかを見ると、9割の学生は「Aがコマを見ている(その姿をBが見ている)」であった。

表1 Aとコマ、Bの関係をどう描いているか

Aとコマ、Bの関係をどう描いているか	52名(100%)
A、B、コマを描いている。	52名(100%)
Aがコマを見ている(その姿をBが見ている)	47名(90%)
Aの表情が描かれていない。	3名(6%)
Aの視線がコマに向いていない。	2名(4%)

A、B、コマ、テーブル以外の背景を描いたのは15名いた。背景を描くことで、この場所や時間を想像する材料になる。15人中12人は、文章記述で「園児」「保育者」「教師」など、保育施設を想定していることがわかる言葉を用いていた。2017年度調査の時には、コマを描いていない学生がいたが、今回の調査では0名で、人物Aとコマを主題として読み取っている。

### 2. 問2 写真から読み取る(文章に表す)

表2 Aは誰か

H29(60名)	Aは誰か	H30(52名)
1名(2%)	子ども	23名(44%)
52名(87%)	男の子	15名(29%)
4名(7%)	園児	9名(17%)
1名(2%)	幼児	5名(10%)
2名(3%)	未回答	0名(0%)

人物Aが、幼く性別は男であること、幼稚園などの保育施設に通園している子どもであることを読み取っている。

表3 Bは誰か

H29(60名)	Bは誰か	H30(52名)
24名(40%)	保育者(含先生、教師等)	37名(71%)
1名(2%)	親(含母親、保護者、養育者)	8名(15%)
28名(47%)	女の子	5名(10%)
2名(3%)	園児(含子ども)	0名(0%)
0名(0%)	大人	2名(4%)
5名(8%)	未回答	0名(0%)

今回の調査で人物Bは、保育者、親等大人であると考えた学生が7割であった。性別は女性であることがわかる回答(母親・女の子・女の先生等)は11人であった。Bを「女の子」としたのは5人(10%)しかない。一方、2017年度調査では、女の子が最も多く(47%)、差異が顕著である。

表4 Aの考えについての記述の分類(複数回答)

Aの考え	H29(60名)	H30(52名)
コマの回転についての疑問	23名(38%)	25名(48%)
自分が回すことへの思い	6名(10%)	2名(4%)
回っている	4名(7%)	0名(0%)
見ている	0名(0%)	4名(8%)
これは何か?	7名(12%)	2名(4%)
その他(眠い、つまらない、悲しい、飽きた等)	7名(12%)	9名(17%)
未回答	22名(36%)	3名(6%)

Aは、コマに興味を持っていて、コマが回転することを疑問に思っていると読み取っている回答が多い。表情からコマの様子に注目しているAが、疑問を持ちながら見ていると想像したと思われる。

表5 Bの考えについての記述の分類(複数回答)

		Bの考え	H29(60名)	H30(52名)
(含園児) 女の子	Aへの関心 (何をしているのか?)		14名(23%)	3名(6%)
	コマへの関心		7名(12%)	1名(2%)
	Aへの関わり(声かけ) (一緒に遊びたい)		7名(12%)	1名(2%)
	未回答		10名(17%)	0名(0%)
(含先生) 保育者	Aへの関心 (何をしているのか?)		12名(20%)	23名(44%)
	Aの行動へのねがい (回せるように)		4名(7%)	2名(4%)
	Aへの関わり(声かけ)		0名(0%)	9名(17%)
	その他		0名(0%)	5名(10%)
	未回答		12名(20%)	2名(4%)
親(含母親、 保護者、養育者)	Aへの関心		3名(5%)	6名(12%)
	Aへの関わり (帰るよ。早く片づけて。)		0名(0%)	1名(2%)
	未回答		2名(3%)	1名(2%)

Bを保育者や保護者と思うと、「Aがコマのことを考えている」と読み取っている回答が多い。女兒だと思えば、「何をしているのか」という疑問と「一緒に遊びたい関心」と読み取っている。

### 3. 問3 写真に映っているものを表わす(文章)

表6 文章表現の分類 H30

A	B	コマ	備考
52名(100%)	36名(69%)	52名(100%)	
コマの記載について *文章で「コマ」と記載のあった人数は「1」に表記した。 *文章で「複数」と記載のあった人数は「2」に表記した。 *「その他」は「きのこみみたいな形など」、「コマ」という記載がなかった者が3名いた。		3名(6%)	コマの名称無し
		43名(82%)	「コマ」と記載
		1名(2%)	「複数のコマ」と記載
		5名(10%)	「4個のコマ」と記載

表7 絵と文章の比較

H29(60名)		内訳	H30(52名)	
絵	文章		絵	文章
60名(100%)	59名(98%)	A	52名(100%)	52名(100%)
59名(98%)	53名(88%)	B	52名(100%)	36名(69%)
59名(98%)	56名(93%)	コマ	52名(100%)	49名(94%)
0名(0%)	1名(2%)	未回答	0名(0%)	0名(0%)

絵には表していたコマについて、「コマ」と表記しない学生が3人いた。これは「おもちゃ」「キノコみたいなもの」「これ」という置き換えをしていて、人物Aが「コマ」と思っていないかもしれないと考えたことが反映されていると思われる。

文章からは、概ね幼稚園での一場面であり、子どもは園児であることが表されている。人物Aを中心にしてこの場面を読み取ると、その中で、まず行為を表そうとする回答(例:机にいくつかのコマがあり、それを見つめて黙り込む男の子。向かい側にいる女性の保育者は子どもを見つめている)があった。また、人物の行為に人物の考えていることも含めて状況を表そうとしている回答(例:机の上に4つのコマが置かれている。それをじっと見つめる子どもがいる。どう使って遊ぶものなのか、どうやったら楽しいのかを考えているように見える。保育者はその様子を見守っている)もあった。

### 4. 問4 保育者としてどのようにかかわるか

表8 保育者としてどのようにかかわるか(複数回答)

保育者としてどのようにかかわるか	人数(%)
1 指導する	20名(38%)
2 見守る	17名(33%)
3 子どもがどうしたいか話を聞く	14名(27%)
4 要求がでたらそれに合わせる	4名(8%)
5 一緒に遊ぶ	9名(17%)
6 その他	4名(8%)

延べ数で最も多かったのは、「コマを回せるように指導する」というカテゴリーの回答であった。次いで、

「見守る」「子どもがどうしたいか話を聞く」となった。「一緒に遊ぶ」回答も9人いて、関わりの一方法として遊ぶことに意味を見出していることが明らかになった。また、複数のカテゴリーに渡ったかかわりを考えた学生もいた。（「1指導+5遊ぶ」5名、「1指導+2見守る」2名、「2見守る+3話を聞く」3名、「2見守る+4要求に合わせる」2名、「2見守る+3話を聞く+4要求に合わせる」1名）

## V 考察

写真の中央にいて表情が見える人物Aを中心に、人物の表情や姿勢を自分なりに絵に描くことで、どのように解釈したのか、自分で選択し解釈した情報が視覚的に明らかになった。遊具としてコマがあり、そのコマを使って遊んでいる姿であること、それは一人ではなく複数の子ども又は大人がいる場所であるため、何らかの関わりをもちながら遊んでいる姿であることを読み取っている。

絵で描写した時に、人物が考えていることをどう読み取ったのかは、解釈が漏れると思われる。もちろん、ある程度画力によるところもあるが、視線の先にあるものを明確にすること、表情から嬉しさや悲しさなどの感情を表すことなどができる。さらに、恣意的に誇張して描けば、他者からもその読み取りが理解できるだろう。吹きだしや記号（?!等）を加えると、平面にその状況の前後のいきさつを表すことも可能になるだろう。そういったプラスアルファを行うことで、その時点での読み取りを残すことができる。

一方、文章においては言葉を選んだ時点で、読み取りについて他者が理解することが容易になりやすい。エピソード記録などで共有することが多いのは、こういった文章化の過程で書き手の状況の読み取りを反映しやすく、その文章を読んで状況を想像し考えやすいからである。今回の調査で、子どもの行為を文章化すること、その文章化にあたって、なんらかの内面の読み取りを加えていくことができることが明らかになった。

保育場面に対して自分なりの読み取りを基に、保育者として何をするのか、問4では、少なくとも「わからない

い」ではなく、考え自分なりの答えを導いている。この答えが導かれたのは、それまでの教科の学修とともに、実習での体験が大きく影響していると思われる。今回の対象は、保育内容指導法（人間関係）を1年生前期に受講し、直前に幼稚園教育実習を行った学生がほとんどである。実習中は、話しかけたり、一緒に遊んだりするなど何らかの行為をしていたからである。

回答のカテゴリーのうち、「コマを回せるように指導する」が多いことは予想通りであった。これは、“コマは回すと楽しい遊具だ”と思っているからだと考えられる。「見守る」「子どもがどうしたいか話を聞く」も多かった。これは、コマは回す遊具だから回せるように助けることが良いと判断するだけでなく、他の援助の可能性を探ろうとしている。子どもを理解するには、まずは子どもの姿を見守り、保育者が自分なりの読み取りをしていくことが必要である。そして、子どもの姿からよみとるだけでなく、働きかけとして要求を聞き取ることが、次の援助を決定していくために有効なことである。経験年数が多い保育者は、保育場面で多様な背景と子どもの内面に考えを巡らせる（佐藤ら2017）。多角的視点による幼児理解や幼児の立場に立った心情理解を基に、自らどのように子どもに働きかけるか、様々な方略の中から、これと思った行為を選択していくのである。今回、「子どもがどうしたいか話を聞く」に加え、「見守る」「要求が出たらそれに合わせる」というカテゴリー2・3・4に分類される回答もあった。かかわりの中で率直に「聞く」ことは理解の一方法である。聞き方によっては子どもに本来の要求でないことを言語化することを強いる可能性はあるが、聞いてその要求に共感することは、共感された子どもにとってはうれしい働きかけであろう。

「一緒に遊ぶ」という回答があったのは、調査時期直前に教育実習があり、子どもと一緒に遊ぶ中で、子どもの要求が明確になり、保育者との信頼関係が築かれる、という体験をしたのであろう。教育実習後に振り返りを行うと、「始めは近寄ってこなかった園児に、実習生の自分から遊ぼうと声をかけて遊んでいるうちに、仲良くなってよく話しかけてくれるようになった」という学生の意見は多い。このことから、人との関係性の構築を体感すると共に、子どもを理解するための方

法として「一緒に遊んでみよう」と促すことも必要になるのではないか。つまり、入学時には“保育者としてすべきこと”として、子どもの世話をする、子どもに教えるというイメージをもっている学生が、余計なお世話でなく、上から押し付ける教え方でない、“一緒に遊ぶ”という発想をするのは、中立的な関係から始まり、徐々に信頼関係を構築しつつ、理解につながる可能性が高い。また、遊ぶと仲良くなる、という子ども時代の人間関係の構築プロセスを思い出すことは、実習で子ども集団に出会う不安を軽減することにもつながるのではないだろうか。ただし、どのような遊びを対象にするかによって“一緒に遊ぶ”ことが“指導する”になることも危惧される。今回の写真の遊びは、手回しコマであり、幼稚園などの施設では現在も大いに使われている遊具であるが、家庭や日頃の遊びとしてはあまり伝承されていない。対象学生の運動好きで運動が得意な特性のため、挑戦して回す技術を獲得しようとは張り切って遊び、“一緒に遊ぶ”と子どもの思いとは乖離してしまうこともあるかもしれないのである。だからこそ、遊びの種類と自分の特性を踏まえ、子どもの経験内容の実態を理解しておく必要がある。(村石2018)

保育は、発達の個人差が大きい幼児期の子どもを対象にしていることで、「達成すべき学修目標に全員が到達するような指導ではなく、幼児期の特質に即した方法が歴史的に求められてきた」(中坪2014) のであり、幼児と共に過ごす生活で、一人一人に対応し、子どもの援助を行うことが求められている。さらに、西川(2010)が「保育者の立ち位置について、子どもが主体的に遊びを展開する共同体の中で、保育者がその活動の主体者である子どもと協働的な関係を構築していく構造を、生活性を重視している立ち位置とみなしている。」と述べているように、子どもと協働的な関係を生活の中で築いていくことが、保育者のスタンスである。つまり、保育者は、子どもとの関係性を構築しながら、子どもを理解し、子どもの思いにそった行動(援助)を行っていくのである。

実習経験のない学生にとって、遊び場面での子どもの理解のきっかけになるのは、写真や映像を通して、遊んでいる子どもの姿の実際を知ることである。そこで提示する遊びの場面は、年齢、人数(一人か複

数か)、場所、時期、材料・用具、といった比較的判断がしやすい物理的状況があるものがふさわしい。その上で、目に見えにくい関係性を想像させる状況を組み合わせた場面を取捨選択し、提示の順序性を考慮していくことが必要だと考える。本調査で使用した写真は、明らかな笑顔で遊んでいたり、対象に触れたり、対象を使ったりしているようなわかりやすい場面ではなかった。視線の先は、コマであることは読み取るが、そのコマを見ながら何を考えているのか、じっくりと考えなければ答えがでてこないような場面である。他者と共に過ごす園の生活の中で、幼児の遊んでいる多様な姿を知り、その多様な思いを理解しようと思う姿勢を育てる必要がある。一律な方法による遊びの指導ではなく、一人一人の思いに応えるための深い理解を目指そうとする、関係論的視点を持った理解へつなげることが、領域「人間関係」の授業で重要なことである。特に、1年前期に配置された「子どもと人間関係」では、基礎としての理解が必要である。本調査では、写真を対象にした。これは、写真であるからこそ、一定の時間をかけて観察することができ、その前後の状況について、想像することに、問の意義がある。限られた情報の中の思考を体験する教材である。一方、動画は、保育場面では状況の情報が多いため、何を選び取るのか瞬時に読み取りを行うために、より実際に近いものとなる。市販されている教材の中には、解説を加えることで、読み取るべき概要を知らせるものもある。解説が加えられた動画は、初期の養成段階で保育現場を知るために有効であろう。また、解説はなく、会話や動きが周囲の環境と共に情報となる動画の場合、読み取りの視点を選択すること自体を学習する機会をもたす。大学での授業では、静止画(写真)から学ぶこと、動画から学ぶことを、組み合わせながら、子どもの理解が深化するように、授業に組み込む必要がある。

## VI 結論

### 1. 授業計画

以上のような調査結果の分析から、「子どもと人間関係」の授業において、次のような授業の全体目標と

授業計画を構想する。

全体目標：現代の乳幼児の人間関係の育ちに影響を与えている社会的要因について理解し、乳幼児教育で保障すべき内容に関する知識を身に付ける。人と関わる力の育ちが、その後続く一人一人の人生を支える力になることを理解する。

表9 授業計画

回	授業の内容
1	現代社会と子どもの人間関係
2	乳幼児教育に期待されるもの
3	家庭・保護者との関係
4	地域の経験と乳幼児教育
5	子どもの生活と遊びにおける発達の様
6	子どもの生活と遊びにおける他者との関係
7	領域「人間関係」のねらい内容
8	自立心の育ち
9	個人と集団の育ち
10	協同性の育ち
11	他者との葛藤体験
12	乳幼児期の人間関係の広がり
13	幼児期に育みたい資質・能力と人間関係
14	幼児の終わりまでに育ってほしい姿と小学校以降の教育との連続性
15	現代的課題と子どもの育ち

## 2. 第6回授業プラン

この中で、第6回の授業プランを提案する。

この授業では、「到達目標(2)-2) 幼児期の子どもの遊びや生活の中で育つ人と関わる力の発達について、教師との関係、幼児との関係、集団の中での育ちを観点として説明できる」の達成を目指すものである。

この授業では、園生活における人と関わる力の育

ちを捉え育んでいく際に、基本となる保育者の視点を獲得することを目指す。第5回から引き続きで行い、遊びの分類や仲間関係の発達に関する基礎理論を紹介したうえで、一人一人の育ちの実態は多様であることや、同じ一人の子どもであっても様々な遊びの中で見せる育ちの実態は多様であることを説明する。園生活においては、常にそういった多様な一人一人の子どもが相互主体的に関心を向け合うことで育っていくこと、子ども一人一人がそれぞれ影響し合い、個人と集団が互いに影響を与え合いながら育つということを教育に生かしていく

### 「第6回 子どもの生活と遊びにおける他者との関係」 授業の目的(ねらい)

子どもにとって、主体的に遊ぶことが大切であること、その遊びに対して周囲の他者(友達、先生等)からの働きかけを受けることが、遊びそのものへの影響を及ぼすと共に、他者との関係を構築することになることに気づく。

### 授業の到達目標

- 1) 子どもは、どのような遊び(遊び方)をしているかを知る。
- 2) 遊びには、誰がどのように関与するかを知る。
- 3) 子どもが遊びに夢中になるのは、どうしてか考える。(幼少期の体験を思い出す)
- 4) 遊びの始まり、実行、終わりの理由を考える。(グループディスカッション)

### 授業の流れ

#### ○第5回の復習

(第5回：生活場面(身支度、食事、手洗いなど)遊び場面(ごっこ、砂場、制作等)の写真を見て、何をしているところか、何歳の子どものか等の読み取りを行った。)

○遊びについて。年齢、集団の違いから、比較、変化を考える。(人数、役割、やりとり、材料、場所等)

○カイヨワ、パーテン、チクセントミハイなど、遊びの基礎理論を知る。

- 自分の幼少期の遊びを思い出し、子どもが遊びに夢中になる理由について考える。
- 遊びの始まりから終わりまでのプロセスを追い、なぜ始まるか、なぜ夢中になって遊ぶか、なぜ終わるかを話し合い、分析する。それぞれの子どもが他者とのように関わっているかを分析する。
- 話し合ったことを、発表しあう。
- まとめ:まとめの中で、保育者の見方や関わり方が幼児の人との関わりに大きな影響を与えていくことを、発達のドーナツ論等を紹介する。また、保育者の援助によってどのような他者への気付きが促されているか、考えさせる。この相互に主体的な関係の中で育ちを見る関係発達論的視点ももてるようにする。

### 3. 課題

領域の専門事項の科目「子どもと人間関係」は、保育内容指導法を受講する以前、本学入学当初の1年生前期としてカリキュラムに位置づけられる。ここで調査の結果から、まず幼児の生活と遊びの様相を理解し、そこには他者との関係性が図られながら営まれることを理解することが、基礎的理解として重要であることが導かれた。そこで、「子どもと人間関係」の授業では、理解を中心として学ぶ授業計画が立てられる。その理解をもとに、保育者として理解をしながら援助を行うという、行為を伴う理解が行われるのである。これは、保育内容指導法や教育実習がその学習に適していると考えられる。このような継続し、循環するような理解について、学生が保育者としての成長をしていくためのカリキュラムの中でどう反映していくのか、実際の授業を実施しながら、確かめていく必要がある。

### 文献

- 赤堀方哉 (2007) 保育者養成校における領域「人間関係」の指導法としてのロールプレイの可能性  
梅光学院大学論集 40号, pp. 27-37
- 麻生武 (2009) 『「見る」と「書く」との出会い フィールド観察学入門』新曜社
- 平山許江 (2013) 『領域研究の現在〈環境〉』萌文書林
- 平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える—〈文部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「幼稚園教諭の養成の調査研究」〉
- 保育教諭養成課程研究会・日本保育者養成教育学会 (2018) 幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について
- 保育教諭養成課程研究会 (2017) 『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか—モデルカリキュラムに基づく提案—』萌文書林
- 神永直美 (2016) 『フォトランゲージで学ぶ子どもの育ちと実習日誌・指導計画』萌文書林
- 岸井慶子 (2013) 『見えてくる子どもの世界 ビデオ記録を通して保育の魅力を探る』ミネルヴァ書房
- 鯨岡俊・鯨岡和子 (2002) 『保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門』ミネルヴァ書房
- 岡田たつみ・中坪史典 (2008) 幼児理解のプロセス—同僚保育者がもたらす情報に注目して— 保育学研究, 第46巻2号, pp. 33-42
- 佐伯胖 (2014) 『幼児教育へのいざない 円熟した保育者になるために』[増補改訂版] 東京大学出版会
- 佐藤有香 相良順子 (2017) 保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い 日本家政学会誌 vol. 68, No. 3, pp. 3-112
- 砂上史子 (2016) 「第2章子ども理解」日本保育学会 『保育学講座3 保育のいとなみ』東京大学出版会
- 友定啓子・青木久子 (2017) 『領域研究の現在〈人間関係〉』萌文書林
- 文部科学省 (2010) 『幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価』ぎょうせい
- 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領
- 村石理恵子 (2015) 短期大学初年次における領域「人間関係」の授業検討 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 第50号, pp. 103-112
- 村石理恵子・土井晶子 (2018) 学習者の課題探求に

つながる教材の検討2—保育現場の写真を用いた  
授業を通して— 日本保育者養成教育学会第2回  
研究大会

村石理恵子(2018) 保育者養成における幼児期の生  
活と遊びの理解:学生自身の遊び体験を活かす授  
業のあり方 東京女子体育大学・東京女子体育  
短期大学紀要, 第53号, pp. 73-82

無藤隆監修・岩立京子編集代表(2007) 事例で学ぶ  
保育内容 領域人間関係 萌文書林

中坪史典(2014) 保育者・教師の感情の表出と抑制  
から考える保育学と教育学の間 教育学研究, 第  
81巻第4号, pp. 54-65

西川正晃(2016) 非認知能力(社会情動的スキル)を  
醸成する保育実践の一考察 大垣女子短期大学  
紀要, 第58号, pp. 1-9